

# 平成24年度東京都高等学校陸上競技対校選手権大会を終えて

5月12日(土)13日(日)は江戸川競技場で、19日(土)20日(日)は駒沢競技場にて、やや風が強かったものの雨の心配もなく概ね晴天のもと行われた今年の東京都高校総体は、3種目の東京都高校新記録と13個もの大会新記録が樹立された実に盛況な大会であった。大会前から「今年の東京都は強い」と予想されていたが、その通り各種目において昨年度を上回る好成績が数多くマークされた。

これらの結果を弾みにして、今年度の新潟インターハイを目指して、南関東大会(6月15日～18日前橋市)でのインターハイへの最終関門を一人でも多くの東京都選手が奮闘し好記録樹立に最善の努力をされることを望む次第である。

今大会に樹立された新記録

東京都高校新記録

女子

100m 11“73 藤森 安奈 東京3年  
七種競技 4811点 伊藤 明子 田園調布学園2年  
4×400mリレー 3'45“41 白梅学園

大会新記録

男子

800m 1'51“65 三武 潤 城西大城西3年(予選でマーク)  
400mH 52“52 田辺 将大良 東京3年  
4×400mリレー 3'14“42 東京高校 3'14”47 八王子高校

女子

100m 11“73 藤森 安奈 東京3年  
12”07 杉山 奈誇 八王子3年 鈴木 夢桜 東京2年  
12“13 高森 真帆 東京2年  
200m 24“64 藤森 安奈 東京3年 24”67 杉山 奈誇 八王子3年  
4×100mリレー 46“54 東京高校  
4×400mリレー 3'45“41 白梅学園  
七種競技 4811点 伊藤 明子 田園調布学園2年

大会タイ記録

女子

100m 12“15 男澤 菜穂 都文京3年

以上の通り好記録が数多く樹立された都総体であった。

今大会の好結果の要因には、単に「有力選手が数多く増えた」とするには安易な気がする。各校の指導者・選手が都内の大会だけではなく、「全国・関東」で戦うための目標をしっかりと持ち、日々の練習に精進した結果ではないかと感じる。また、来年迎える「東京国体」の強化活動が徐々に実を結びつつあるのではないかと考える次第である。

また、本大会を振り返ると、女子の活躍が目立った都総体であったのではないだろうか？

昨年度の北上インターハイで東京高校が男子総合優勝を果たしたのをはじめ、男子は3種目にも優勝し数多くの入賞者を出したが、女子は入賞僅かに一つの状況でした。しかし、昨秋の関東新人大会では女子が奮起し優勝種目も8都県最多としました。今年は男女とも南関東・インターハイで活躍が期待できる選手が多く楽しみです。

そこで、都総体を振り返るとともに関東大会をどう戦うかをレポートいたします。

女子では、100mで優勝した藤森 安奈（東京）の11“73は高校歴代10位に相当する好記録であり、全国優勝候補に名を連ねるには十分であろう。藤森の他にも、杉山 奈誇（八王子）利藤 野乃花（白梅学園）高森 真帆・鈴木 夢桜（ともに東京）男澤 奈穂（都文京）までが100m12秒1台とし、200mでも24秒台の記録を持つ選手が4名もいるという女子の短距離の充実ぶりは目を見張るものがある。

400mでは今年からこの種目に挑戦している利藤 野乃花（白梅学園）が55“97で優勝したが、レース経験はマイルリレーで十分積んでいるだけに100m11秒台のスピードを生かして、まずは54”65の東京都高校記録の更新を目標にしてほしい。54秒台ならば例年全国大会では上位に入ることができる。

また、走高跳で昨年インターハイ決勝まで進出した伊藤 明子（田園調布学園）が落選したのは残念であるが、七種競技では4811点もの得点を重ね見事雪辱を果たした。この記録は男子八種競技の栗原選手同様、昨年のインターハイの優勝記録を上回るもので、今後の試合がますます期待が持てる。

4×100mリレー決勝では、東京高校が46“54の大会新記録をマークしたが、昨年記録したチーム記録には及ばなかった。しかし、今年出場したレース全てが46秒台と安定しており、今季全国でも46秒台をマークしているのは東京高校だけであり全国優勝候補NO.1と言えよう。リレーの優勝候補は東京高校だけではない。

4×400mリレーでは白梅学園が予選でマークした3分45秒41は東京都高校新記録であり、今季これまでの全国ランキングでもトップである。エースに成長した利藤をはじめ安西 この実、志茂 里佳、香坂 さゆりと昨年のインターハイ準決勝まで経験した成果が活かされた結果、チーム内の競争も活性化され個々のレベルが確実にあがっていると推測できる。都総体では予選・決勝とも競り合うことなく単独走であった事もあり、競り合えばもっと記録が伸びることから関東・全国での記録に期待が持てる。

中長距離では、1500m優勝の卜部 蘭（白梅学園）が昨年国体で入賞している実績を持っているが、一時の体調不良から回復傾向にあり今後に期待が持てそう。3000m優勝の谷萩 史歩（八王子）は自己記録を更新し9分30秒を切ってきた。ここ数年東京都選手がインターハイに出場できていない状況であるこの種目でのインターハイ出場を期待し応援したい。

また、400mHでは高島 紗矢子（都粕江）がひと冬で大きく成長し一気に1’01“95にまで記録を伸ばした。条件次第では全国の決勝も視野に入れる事が出来る記録だけにこちらでも期待したい。100mHの武山 詩歩（東京）は昨年南関東7位だっただけに「今年こそは」と狙っていることだろう。両名とも決勝で実力を発揮できるよう準備してほしい。

跳躍種目では、走幅跳で林 小百合（八王子）、水口 怜（白梅学園）が5m70を越える実力があり関東でも上位に食い込むことは可能だろう。昨年インターハイに出場した國分 春菜（東京）や力のある佐野 恵（都文京）にもチャンスがあるが5m60以上は必要だろう。走高跳では伊藤はじめ実力者が数名落選してしまったため関東大会では上位を狙うのは苦しいだろうが、波多野 優衣（八王子）は今季好調なだけに1m65以上をクリアしてインターハイ出場目指し頑張してほしい。

奮起を促したいのは投擲陣だ。昨年の南関東大会では神奈川県勢に圧倒され砲丸・円盤では一人もインターハイへ出場できなかっただけに、今年は一人でも多くのインターハイ出場を勝ち取りたいところだ。その中で、砲丸の長沼 瞳（郁文館）には13m、円盤の武末にも40mの実力があり、二人とも昨秋の関東新人大会優勝者なだけに多くを望みたい。また、複数選手のインターハイ出場を期待したい。逆に、やり投げは今季南関東地区のレベルが高いと予想されるため45mに近づく事が出来ないと6位に入る事は難しいだろう。1年生ながら都大会に優勝した澤田 珠里（白梅学園）、2位の水本 有香（明中八王子）にはその可能性があるだけに思い切った投擲をしたいところだ。澤田は七種競技でも1年生歴代5位乃相当する4597点をマークしており、これはインターハイで入賞可能な得点でもある。潜在能力の高さから伊藤同様、将来が楽しみな選手である。

男子では、100m・200mで徳岡 隆之介（八王子）が2冠を果したが、現在の實力通りの結果であったと思う。潜在能力の高い丸池 優太（昭和第一）も400mまで3種目に入賞し力のあるところを示した。両名をはじめとする関東出場者には全国大会の切符を手に入れるべく更なる切れ味を増していきたいところだ。

400mでは、昨年インターハイに出場している三武選手（城西大城西）が予選のラストの直線で突風に煽られ記録を落とし落選する悲運もあった。そんな強風の中で47秒台をマークした田辺 将大良（東京）はじめ上位入賞した選手たちの力走は高い評価といえる。

400mと同じ初日に行われた、強風下での1500mで優勝した打越 雄允（久我山）はじめ上位の記録は全国レベルに匹敵するかと思う。特に昨年のインターハイで2位とした打越選手には念願ともいえる全国優勝に弾みがついた事だろう。また、5000mでも優勝したことから故障から完全に回復したことが証明された。自己記録で優っている武田 凜太郎（早稲田実業）との対戦は今後も関心がもたれる。

そして、今大会最も熾烈を極めたのは800mの予選であった。決勝に進出できた8番目の記録は1'55"32で、1'55"41をマークした2人の選手をはじめ1分55秒台で予選敗退という激戦であった。昨秋の新人大会で優勝した中村 拓哉（都町田）もそのハイレベルな予選で涙をのんだ。その予選最終組に出場した三武潤（城西大城西）は全国大会並みの快走で大会記録を上回る1'51"65をたたき出した。決勝では白石 浩之（立教池袋）と三武のマッチレースとなったが、やはり三武の伸び脚が一枚上手であり先着した。この種目からは多数の選手が全国に出場してもらいたい。

110mHは、昨年国体で入賞している2年生の坂本 景（東京）が15"09で優勝したが、向い風3.7mの悪コンディションであった中での記録としては、2位の栗原 彰理（都東大和）とともにインターハイを狙える位置にいるといえる。ここ2年、5人がインターハイに出ただけにがんばって維持してほしい。400mHでは、400mに優勝した田辺が決勝で大会新記録となる52"52という自身初の52秒台をマークし全国戦線に名乗りを挙げた。昨年骨折で出場できなかった悔しさを晴らすべく関東では東京都高校記録の更新を目指してほしい。3000m s cでは、新島 英虎（久我山）が自己記録を大きく伸ばすとともに2位を引き離しての優勝は見事であった。ハードリングもスムーズで走りも安定しており関東大会でも上位を狙う事ができそうだ。

跳躍種目は、全体的に関東大会では苦戦を強いられそうだが、何とか踏みとどまって一枚でも多く全国への切符をゲットしてほしい。その中で、走高跳では先崎 航（都つばさ総合）にがんばってもらいたい。去年は日本ユースで3位となっているが、今年はまだ自己記録を更新できていない。實力は東京都1番だけに自信を持って跳んでほしいものだ。走幅跳では1年生の間中 太亮（日大豊山）が優勝したが、昨年国体で入賞している内川選手（東京）を破っての勝利は価値が高いと言えよう。100m10秒台の走力を備え、試技内容もコンスタントで勝負強い要素も持ち合わせているので全国大会へも近い存在だ。三段跳には好選手が揃った。決勝では程よい追い風であったこともあるが6位入賞した全員にインターハイ出場のチャンスがあるといえる。特に優勝した石川 颯（東京）、佐々木 恭平（都青梅総合）には全国決勝進出できる力があることがわかっただけに15mオーバーを期待したい。関東大会に出場できない7位が14m台であったのはこれまでに記憶がない。

投擲種目では、砲丸投の幸田選手（東京）が16m07の大会記録を超える試技もあったが惜しくもファールとなり15m96での優勝となった。この記録は昨年のインターハイでも3位に相当する記録である。去年に引き続きインターハイで同校より優勝者が出る可能性もあるだろう。2位とした1年生の安藤 夢（東京）も15mに迫る投擲を見せており楽しみである。やり投げでは優勝した板橋 悠人（穎明館）は春先に61m05をマークしており實力はあるが、痛めている肘の回復が心配される。堀口 諒太（東京実業）山下 大輔（東大附）にも一発の魅力があるので思い切った試技を期待したい。ハンマー投げでは小林 祐貴（成城）が唯一55mを狙える力がある。前半から積極的な投擲をしてもらいたい。

男子八種競技では栗原 彰理（都東大和）が5515点という昨年度のインターハイ優勝記録を上回る好得点

をマークした事も大いに評価される。得意なハードルや高跳びで優位に立ちたい。今後の大会で条件によっては東京都高校記録の更新はもちろん、全国制覇に最も近い状況であることが証明された大会であった。

4×100mリレー決勝では、男子は全チームがチーム記録を上回る好レースを展開した。優勝した八王子高校もチーム記録を大きく更新し南関東でも上位を狙える状況となった。

4×400mリレーでは八王子高校と東京高校が最後まで競り合う形で両校が大会記録を上回る好レースを展開した。序盤は東京が先行したが、3走で八王子が逆転し5mの差を東京のアンカー大串がゴール前にかわし先着した。両校とも関東でも優勝を争う走りができるのでしっかりゴールまでバトンを運んでほしい。

#### ・インターハイへ向けて

昨年度、北上インターハイへ出場した東京都選手は、男子41種目（延べ）とリレー3チーム、女子17種目とリレー3チームであった。ちなみに一昨年（2010年・沖縄）は男子34種目と2チーム、女子19種目と3チームの出場でした。

今年は、女子に有力選手が多いことから30種目（延べ）を越えることは間違いないだろう。男子も昨年を上回ることを期待したい。都大会優勝者はもちろん、6位で出場する選手にも同じだけインターハイへ出場できるチャンスはある。都大会6位の選手がインターハイへ出場した例は毎年あるだけに、大会当日にしっかりと調整し自分の実力を100パーセント出せるように準備してほしい。

北関東の群馬県では午後に急な雷雨やにわか雨が降ることも多い。しっかりとした用意をして臨んでください。また、多くの皆様に出場する選手たちに絶大なるご声援をお願いします。

そして、東京都史上最多の選手団を組み新潟インターハイへ出場しましょう。

「がんばろう！東京」

東京都高体連強化委員長

小林 隆雄